

日没までの ウィンブルドン

沢松奈生子 元プロテニスプレイヤー

ウィンブルドンのテニスコートには当時ナイター設備がなかった。試合は日没まで。午後九時頃、ようやく日が沈み、選手のどちらかが「ボールが見えにくい」とアピールして審判が認めれば、試合は翌日以降に持ち越しになる。全仏オープンが行われるパリ・ブローニュの森のコートも同様だ。ナイター設備が充実し、煌々とした照明のもと、深夜まで試合を続ける日本とは対照的だ。

父の転勤で幼い時期をドイツで過ごし、十歳で帰国した時に驚いたのが、日本の「明るさ」だった。そこかしこに光が溢れ、色とりどりのネオンが煌めく街。ドイツでは目にしたことのない明るさは、子供心に衝撃だった。「この国には電気がたくさんあるんだ」と。

ドイツをはじめヨーロッパの街は仄暗い。ホテルの廊下も通る人が自分で電気を点けるし、子供たちも使わない場所の電気は消し、ごみの分別などの行動が身についている。節電意識、資源を大切に

する意識が浸透していて、日本との違いを感じた。
明るすぎる日本。引越のとき電源プラグの多さに、こんなに電気を使っているのかと驚くが、もう一度会いたい灯りもある。夙川の自宅のテニスコート脇にあった外灯だ。日が暮れて周囲が暗くなる



でんき * STORY

きの子供ではなかった。外灯が点くのは「もうすぐ練習が終わる」合図であり、「だから、もうちょっとだけ頑張ろう」という励まし。まるで友だちのような温かい灯りだった。

その外灯も、阪神大震災で全壊した自宅とともに失われた。震災当日、私は全豪オープン選手権で遠征中。ライフラインが止まり、どれだけ大変だったかを後で家族から聞いた。あつて当たり前と感じているものは、なくなって初めてその大切さに気づく。

今、私たちはさまざまな場面で電気に頼っている。テニスコートの設備を動かすのも電気。以前、試合の途中で雨が降り出し、開閉式の屋根を閉め始めたが、途中で止まってしまった。電気系統の故障。こんなに大きなものも電気で動いていたんだ、と改めて知った。電気や資源、限りあるものをいかに大切に使うか。子供を持って、それを次の世代に伝えたいと強く感じる。ただ、日々の暮らしで電気の大切さを実感するのは難しい。東日本大震災直後は日本でも節電意識が高まったが、今はそれほど緊張感はない。喉元過ぎれば何とやらで「ま、いいか」となりがちだが、例えば「電気のない暮らし」を体験する場があってもいい。昨今のキャンプ場は電源完備のところが多いが、電気を使わないキャンプ。そういったことを体験・体感しないと、日本人に電気の大切さはわからないかもしれない。 **躍**



さわまつ なおこ
元プロテニスプレイヤー
1973年兵庫県出身。両親、叔母ともウィンブルドン出場のテニス一家に生まれる。15歳で全日本テニス選手権初出場・初優勝。神戸松蔭女子学院大入学と同時にプロ転向。WTAベストランク14位。グランドスラムベスト8。98年現役引退後はテニス解説、コメンテータ等広く活動。著書『ウィンブルドンの風に誘われて』
http://www.wonderboxllc.info/?page_id=28